（令和６年度国際交流員通信 vol.8）

下関市国際交流員　李　佳琦
（中国山東省青島市派遣）

「哪吒（ナーザ）」

下関市国際交流員の李佳琦（リ　カキ）です。待ちに待った５年間。「あの子」の降臨から５年、2019 年に上映された映画『哪吒（né zhā）1：魔童降世』から５年、『哪吒２：魔童大暴れ』は１月 29 日の公開早々、中国の映画歴代興行収入ランキング１位となりました。現時点（2 月 19 日 15 時）では、興行収入が 124 億元（約 2,600 億円）を超え、世界のアニメ映画歴代興行収入ランキング１位に達し、世界の映画歴代興行収入ランキングのトップ５（150.19 億元）に届く勢いです。哪吒は日本ではあまり知られていないようですが、中国では国民的な人物なので、ぜひ皆様にも紹介したいと思います。

2025 年『哪吒２：魔童大暴れ』

哪吒（ナーザ、あるいはナタ）とは、中国の古典小説『封神演義』『西遊記』にも登場する少年の武神です。蓮の花や葉の形の衣装を身に纏い、乾坤圏（金色の金属製の輪）、混天綾（仙力を秘めた赤いシルク）、火尖槍（焔の形をした槍）などの武器を持ち、風火輪（二個の車輪の形をした乗り物。火と風を放ちながら空を飛ぶことができる）に乗る子どもです。『西遊記』にも登場する人物なので、もしかすると知っている方もいらっしゃるかと思います。

哪吒の由来は、インド神話のナラクーバラという神ですが、ナラクーバラが中国に広まっていく中で、次第にインドの神である事が忘れられ道教の神の一柱に収まったということのようです。哪吒が描かれた物語ごとに設定が微妙に変わっていますが、明代（1368 年―1644 年）の有名な小説『封神演義』で描かれた、**「宝物「霊珠子」にありながら、人間である陳塘関の守将「李靖」の第三子として生まれ変わり誕生する」**という斬新な設定が、この度の映画に選ばれたことによって広まっています。

1979 年『ナーザの大暴れ』

私と同年代の人は皆哪吒の話を知っています。小学生の時、学校が終わると急いで家に帰っていたのは、『哪吒伝奇』を観るためでした。『哪吒伝奇』で出会ったかっこいい哪吒と離れ十数年が経ちましたが、2019 年の夏休みに思いがけない再会を果たしました。『哪吒 1：魔童降世（ナーザ 1：魔童降臨）』の上映により、私も私と同世代の人も皆、昔の記憶が蘇りました。しかしここで現れた哪吒は昔のかっこいい哪吒とは違い、目鼻立ちが悪くて醜く、背が低くてぽっちゃり体型、不ぞろいな歯並びといった、外見からはとても才気が感じられるものではありません。最も気になるのはその目です。パンダメイクをしたかのような目は、かっこよくないばかりか、不細工、ダサいと言ってもいいくらいに、可愛らしさゼロ。そのようなひどい見た目の主役なのに、高い評価が寄せられたのはなぜでしょうか。

2003 年『哪吒伝奇』の哪吒と 2019 年『哪吒 1：魔童降世』の哪吒

おそらく、作品から伝わる「反骨精神」によるものではないでしょうか。

(※(注意):次ページ以下の内容は 2019 年の『哪吒 1:魔童降世』のネタバレになります！)

「霊珠」として生まれるはずだったのに、陥れられて悪を象徴する「魔丸」として生まれてしまった哪吒には、3歳の誕生日に世界に大きな災難をもたらし、天罰を受けて死ぬという悲惨な運命が待っているにも関わらず、神様に弟子入りし、邪悪を払う努力を重ねていました。その哪吒の姿に、哪吒の母は心を痛め、「どうせ死ぬなら、楽しい人生を過ごさせてやりたいのに」と思います。しかしながら、村のどこに行っても避けられ、友好的な態度を示しても嫌われ、良いことしても悪い奴として扱われる哪吒は、「人の偏見は動かざる山のごとし」ということを痛感していきます。「魔丸」である以上、村民からの偏見は止められないものです。一人ぼっちの孤独な日常を過ごすうち、哪吒はとうとう「問題児」になり、村民に怖がられる存在となっていきました。

2019年『哪吒1：魔童降世』の「問題児」の哪吒

そのような哪吒でしたが、「我が子を妖怪と言われたまま死なせたくない」という父からの一言で生まれ変わります。「魔」として生まれた不公平な運命にめげず、敢然と戦い、自分に対し偏見を持つ村民を守ることまでして問題児から村のヒーローへと変わっていく哪吒は、「運命なんてクソ喰らえ！魔であろうが仙であろうが、己の運命は俺が決めるんだ」と唱え、「ふてくされた」状態から「燃え上がる」状態へと変化しました。

すると3歳になる日、「魔として生まれた不公平な運命なら、その運命とことん戦う」と、両親と師匠のあたたかい視線を浴びながら、「霊珠」として生まれた友人と一緒に、天罰の雷に立ち向かう哪吒。

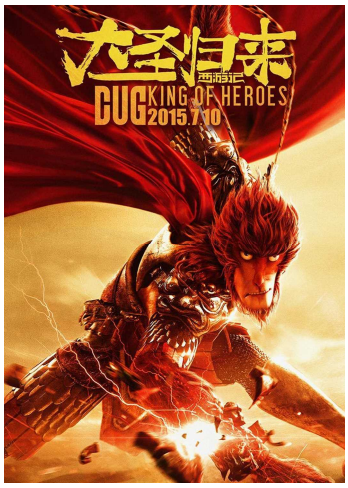
燃える！

運命という強い力に屈する気が微塵もなく、「反骨精神」を貫く哪吒の姿には、燃えるとしか言いようがありません。

2025 年『哪吒 2：魔童大暴れ』のポスター

前作で天罰に立ち向かった結果、体が滅び魂のみが残った哪吒とその友人は、新作ではどのように復活し、またどのように活躍するのか、本当に楽しみです。

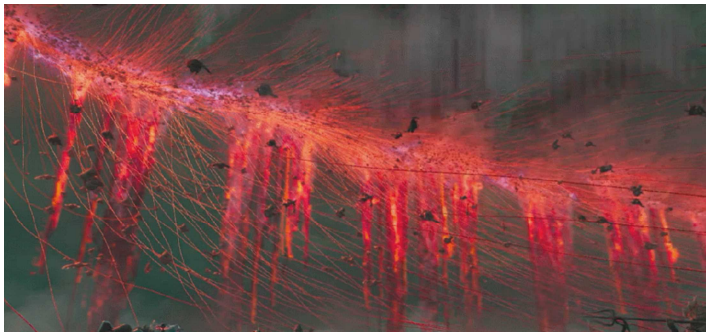
中国の神話において、「反骨精神」を代表する人物は 3 人おり、「天庭三大反骨仔」（天界で反骨精神を持った 3 人）と呼ばれています。魔丸である哪吒の他、石から生まれ竜王の宝物を奪い天界を大暴れした孫悟空と、玉帝（天界の一番偉い仙人）の妹と人間の間でできた仙と人のハーフである二郎神楊戩は、皆「反骨精神」を持つ人物です。近年はそれぞれ新バージョンの映画が上映され、いずれも好評を博しています。しかし、ただの反骨行動好きな孫悟空とは違い、哪吒の反骨は誤解から生まれたものです。魔として生まれたことにより、どんなに頑張り善意を払っても周りの人に受け入れてもらえない哪吒は、次第に孤独感を積み重ねていきましたが、父親の一言で変わり、運命ととことん戦うようになりました。自分の運命に屈折せず、最後まで戦い続ける気持ちが、現代の人にすごく魅力を感じさせるのでしょう。



哪吒、孫悟空、楊戩（映画ポスターより）

『哪吒 2：魔童大暴れ』は物語にこだわっただけでなく、中国伝統の美的感覚を忠実に再現した上、最新の SFX（映画の特殊効果）技術が前作よりも大きく飛躍し、視覚効果にも趣向が凝らされています。全中国のスタジオの力を合わせ、5 年もかけてやっと出来上がった作品。ワンシーンのレンダリングに、平均 200 時間超かかったことからしても、監督がどれだけ『哪吒 2』を磨き上げてきたかということが窺えるでしょう。

製作中の特殊効果のワンシーン～海底柱に纏う鎖～



製作中の特殊効果のワンシーン～風で舞い上がる髪の毛のような鎖～

また、音楽についても、琵琶や嗩吶（チャルメラ）、笛、簫など中国の伝統楽器を中心に、モンゴル族や侗族など少数民族の曲も取り入れ構成されており、中国神話をモチーフにした映画に、独特な個性を与えることに貢献しています。

X での投稿では、「中国アニメは今後ブランド力を付ける事が更なる発展につながるでしょう。いい意味で日本のアニメと切磋琢磨、ライバル関係になっていくといいですね」とコメントした日本の方もいます。アニメ好きな私も、「中国のアニメーションにもますます良い作品が現れて来るのではないか」と期待の思いが湧いてきています。

『哪吒 2：魔童大暴れ』は、海外でも相次ぎ上映されていますが、日本での上映に関してはまだ詳細な情報がなく、少し残念に思っています。中国の報道では、日本で上映する計画があるという記事もありましたので、それを頼りに一日でも早い公開を祈るばかりです。

公開されたら是非映画館で『哪吒 2』の魅力を味わってください ^ ^

2025 年『哪吒 2：魔童大暴れ』のポスター～ナタ：俺は魔だけど、なにが悪い！～